名古屋女子大学　紀要　37（家・自）85～95　1991

東南アジアにおける民族服の研究（第８報）
――北部タイ山地民族　ラワ族の生活習俗と衣装――

柴村恵子

Studies on Folk Costumes of South-East Asia （Ⅷ）
The Living Custom and Costumes of the Lawa Hill Tribes of Nortnern Thailand

Keiko SHIBAMURA

緒　　言

北部タイには現在メオ族，ヤオ族など10数種類の山地民族がいるが，その多くは山岳地帯に住んでいる．近年その彼らの生活にも近代化の波が押寄せ，それぞれ固有の生活文化に変容が見られるようになってきた．そして，その波を積極的に受け入れようとする一方において，今なお先祖伝来の文化を固持している部分も見られる．それは衣装をはじめ風俗，習慣，宗教儀礼にいたる伝統文化に残されている．筆者は1980年以来その残されている生活習俗を記録に残すため現地調査を続け，それぞれの民族の衣装を中心に名古屋女子大学の紀要27号（アカ族），28号（メオ族），32号（ヤオ族），33号（リス族），34号（ラフ族），35号（カレン族），に報告してきた．これらの民族は，それぞれ近隣の国からおよそ 100年以上かけて移住してきたものが多く，その源郷は中国，チベットなどと伝えられている．カノミタカコ氏によると，ラワ族はタイの原住民であると自称している[4]と言われているが，若林弘子氏によれば中国雲南省の西南部からミャンマーにかけての国境山岳地帯に居住する佤族の分派と言われている説もある[6]として一様ではない．また，その一部はすでに平地に下ってタイ人と変わらない生活を送っているグループもあることも報告されている．

今回はまだその山岳地帯に住み，伝統的な生活習俗を保持しているラワ族について報告する．

調査方法及び資料

1．現地調査……1989年12月に泰日協会駐日代表カノミタカコ氏の案内により，ラワ族の多く住んでいる地域の一つで，チェンマイ西南のマエ・サリエンの手前の山道を10km程山中に入ったバン・チャン・ノーモイ村を訪問し観察，聴き取り，写真撮影を行い調査した．この村は27戸の規模で後述する伝統的山地の村に属する部落である．

2．資料……現地で得た資料をもとに京都大学東南アジア研究センターで得た資料並びに末尾にあげた文献等を総合し，資料を整理して考察を行った．

結果及び考察

Ⅰ．ラワ族の概要

1．分布と人口

ラワ族は言語的にはモン・クメール語に属し，佤族から分派した種族である．また，この種

族は雲南からタイ西北部とミャンマーにかけて南下し，G. Young (1969)によればタイ国には東方はボウ・ルアン，西はマエ・サリエン，マエ・ホンソンやチェンマイ地方のほぼ楕円の円内に住んでおり，チェンマイ近くに住むラワ族は除々にタイ人に同化をはじめている．ボウ・ルアン地方に住んでいるラワ族は100年近くの間あまり移動することなく住んでいる[1]と言われている．一般に彼らは焼畑耕作を行いながら数年ごとに移動するためタイ政府は彼らに定住化を奨めているが，なかなか正確な位置や人数をつかむことはむつかしいようである．カノミ氏（1982）によるとタイの西北部のミャンマー寄りのマエ・サリエン，マエ・ホー，ホッなどに多く住み，チェンライ，ランパンにも少数住んでいて，人口はおよそ１万人である[4]と言われる．

２．部落構成の特性

アメリカの人類学者クンシュタッターはタイ西北部のミャンマーとの国境に近いマエ・サリエン周辺の調査からラワ族の村を次の４つに区分している[3]が，それによれば

(1)　伝統的山地の村：村は20戸から100戸程度で構成され，住民は焼畑耕作を営み自給自足の生活をしている．宗教は仏教徒と称するものもいるが，伝統的アニミズムである．物質文化は民族の伝統的なものであり，男女共に民族服を着用している．

(2)　タイ化した山地の村：伝統的な山村よりも村落規模が大きく200戸に達する村もある．村には商店があり，朝市が開かれ，周辺のタイ族の農村又は，平地文化の影響を受けている．特に，仏教の影響を強く受けているが，アニミズムの信仰や儀礼もかなり多く残っている．焼畑耕作に依存しているが，賃金労働に従事する者もいる．住居はタイ族スタイルになり，衣服も市販のものが多く利用されてきている．

(3)　タイ化した谷間の村：若干の風俗，習慣にラワ族の伝統が残っているが，周辺のタイ族の村と区別しにくい．村人はほとんどが仏教徒で北部タイ語を用いるものが多い．しかし，一部の老人はラワ語を使用している．生計は水田耕作にたよっている．その他，生活全般にわたってタイ化が進行しているが，わずかに民族の伝統も残っている．

(4)　移住民の村：タイ族，カレン族の家々と混在するものも多く，40戸くらいが村の構成単位になっている．子供たちはタイ族と同じ小学校に入る．宗教は大半が仏教徒であり，アニミズムはほとんど失われている．一部にキリスト教徒もいる．言語は北部タイ語であるが，家庭などではラワ語も話している．生計は水田耕作，茶園の仕事，道路工事などの労働をしている．

このうち，筆者の調査した村は前述のマエ・サリエンの手前を山中に入った所で，この区分によれば(1)のグループに属する伝統的な山地の村に該当する．村の大きさは27戸で180人くらいの人が先祖代々ここに住んでいるという村であった．しかし，その一方に，ここへ来る以前はランプーに住んでいたが，そこには村人に慕われていた王女がいた．その王女が恋をしたが失意のため亡くなってしまったという．それから村人はちりぢりになってしまって，彼らはここへ移動してきたという伝説が残っていた。このような伝説ももっているが，ラワ族はタイの先住民族であると自称しているほど土着の民族を主張している人々である．

村には10年程前に建てられたという小学校があり，また，５・６年前にキャベツ・ロードとしてキャベツを出荷するために通された道がつけられていた．このようにして，(1)のグループに属する山地の村にもだんだん近代化が進みつつある．衣装の面においても同様であるが，特に男性の洋服化が目立った．

Ⅱ．生活習俗

１．生業と食生活

北部タイの山地民族はいずれも米が主食であるが，それは移動をしながら焼畑耕作によって

作られるものである．タイ政府は焼畑造成のための森林伐採については，かなり立ち入った指導を行っているが，ラワ族はそれ以前から自然の破壊には気を使う種族で，簡単に処女林に火を放つことはめったにしない．焼畑の造成は彼らの宗教的儀礼と極めて関係が深いので，それについては信仰儀礼の項で詳述するが，焼畑で栽培される作物は米が主で，その他カボチャ，トウガラシ，キャベツ，その他の野菜とワタ，ケシなどである．中でも彼らの育てるトウガラシは質がよいと言うことで知られるが，この村ではキャベツの出荷に力を入れている．彼らの食事は他の山地民族と同様，１日２回のようである．しかも，これは必ずしも一定の時間に取るわけではなく,特に子供などは空腹になると時間かまわず食事をしているのをよく見かけた．食事は米が主食で，農村の中国スタイルとよく似た，ご飯の上におかずや，その煮汁をかけて食べるのが日常の食事である．しかし，何か儀礼的な行事があると精霊に生けにえとして供えられた鶏や豚，その他水牛などの肉を細かく切って煮て，それに血を混ぜて固めたものを食膳に供する．これは血には生命が宿っているという伝説によるものであるが，それは霊の尊厳を意味しているようである．また，一般に山地民族は酒が好きで，それぞれ彼ら独特の醸造方法で地酒を造り，事あるごとに村や家の霊に酒を供え，また，これを飲む習慣がある。ラワ族には善い霊は大酒飲みであり，酒の好きな人は誠実で人とのつき合いも円満であると信じられていてよく飲むが，これはこの種族の一つの特色的考えであろう．

２．住生活

ラワ族の先祖は木彫を生業としていたという形跡が見られる[7]と言われているが，筆者の調査したバン・チャン・ノーモイの村にもその名残りが村の中や家の柱など所々に残っていた．その彫りものは家族に幸運をもたらしてくれるものと信じているようであるが，彫り方が不ぞろいになると不幸をもたらすと伝えられていて，それはどの家にもあるものではなかった．ラワ族の高床式住居は，その生業だったためか同じ佤族のグループの住居に比べて高度な施工技術をもっていることはこの種族の特色であろう．

ラワ族の家族は一般に核家族であるが，末の男子が家を継ぎ結婚して両親と一緒に住む場合が多い．その住いは高床式の母家と高床式の穀倉一棟で構成されている．この高床式住居はもともと彼らの先祖が水田耕作民であったことを裏づけているわけであるが，それが様々な要因により山岳地帯に住むようになり，焼畑による陸稲耕作に転換した今日の生活様式になっても往古からの高床式住居が固持されている．このラワ族の住居については若林弘子氏（1982）が詳細に報告されているが，筆者が今までに調査した北部タイの山地民族の村の中でも若林氏の所見と同様，ラワ族の住居は木材が多く柱などもがっしりと頑丈な建物であった．この建築材料もかっては竹材が多く使用されていたが，壁や床にまで木材が使われるようになったのはおよそ10年前からのことである[7]．その理由は村に大鋸が入り大木から板を作り出すことが容易になったからのようである．なお，彼らは建物の柱が太いほど良い住いと考えているようであるが，これはラワ族の定住化が進んだことと関係があるように思われる．この高床式住居を外観した場合の顕著な特徴は母家の一方の妻側に面積の広い露台が張り出しており，破風口の大きな入母家造りの屋根とその屋根の妻に現われた破風板に見事な彫刻が施された干木が結ばれていることである．調査に入った家は，はし子を登った中央に集会のための広間があり，その右側に２室あったが板戸を締めてしまうと他の山地民族に比べて，がっしりとした建物だけにプライバシーが保たれているような部屋造りになっていた．集会の場の床には柄の入った厚いビニールの上敷が敷かれていたが，近代化の一端のように思えた．床下は仕事場に利用されており，一部50㎝程の高さに床が張られ，そこで機織りをしていた（図１）．若林氏によると

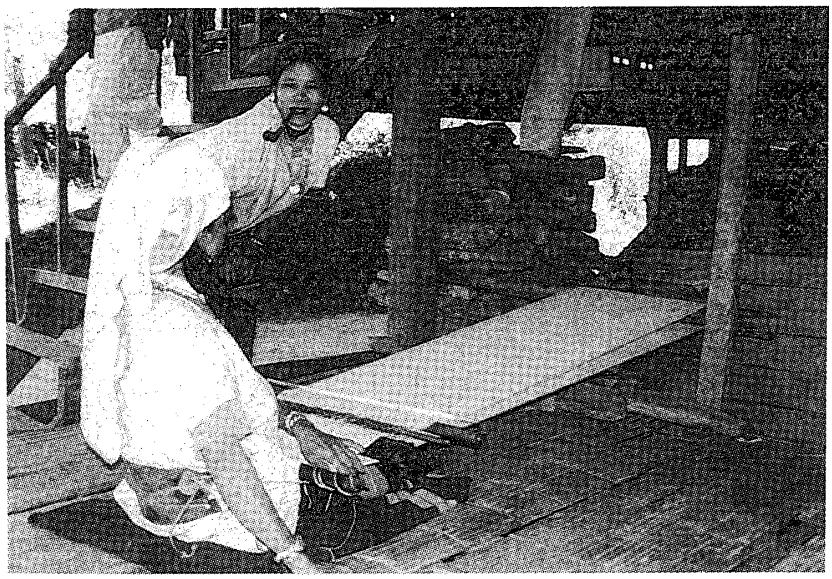


図1　床下を利用しての機織り

床下は仕事場として利用されることはなく，夜間のみの鶏舎などに利用するとか，農具や古材などを置く場所として利用される程度といわれているが，仕事場として利用されていたことは，この村の特色のようである．

3.信仰・儀礼

先にも述べたがアメリカの人類学者クンシュタッターのタイ西北部のマエ・サリエン周辺のラワ族調査から村を4つのグループに分けているが，この分類によって区分してみると，

(1)　の伝統的な山地の村では宗教はほとんどが伝統的なアニミズムである．中には仏教徒と称しているものもあるが，特に寺があるわけでもなく，僧侶もいなく，せいぜい家の壁に仏画を貼っている程度である．

(2)　のタイプはタイ化した山地の村である．ここは周辺のタイ族農村の影響を大きく受けている村で，仏教がかなり広く浸透しており，寺もあり僧侶もいるが依然として伝統的なアニミズムの信仰と儀礼も残っている．

(3)　のタイプはタイ化した谷間の村で，ここはすでに周辺のタイ族の村とほとんど区別ができない程タイ化しており，ラワ族の風俗習慣が若干残っている程度である．村人の宗教はすべて仏教であり，寺のあることは勿論であるが僧侶もラワ族の出身者である．

(4)　のタイプはいわゆる移住民の村といわれる村で，タイ族，カレン族が混在しており，ラワ族だけの部落構成ではない．アニミズムはほとんど失われており，仏教の他にキリスト教徒に改宗しているものもある．

筆者が調査したバン・チャン・ノーモイ村は(1)のタイプで村人はアニミズムを信仰しているが，その本質的な信仰は万物に宿る善魂と悪魂にあるとされ，供物を供えることは重要なことで，豚や鶏，手に入れば水牛までも生けにえに利用する．彼らには偶像もなければ寺社もないがしかし，祈とう師たちは常に悪霊はいかなる場所へも移動するし，人間の体の中にもひそんでいることもあると信じている．その一例をあげると手首や首に巻かれた「魂の紐」と称されるものを結んでいることで悪霊から守られると信じている．筆者が訪れた時も民族服を着用した宗長であり村長である人が，筆者の名前を聞きそれを呪文のように唱えながら平安無事，健康を祈って太い木綿の糸を旗結びに似たラワ族特有の結び方で筆者の手首にその魂の紐を結び

つけてくれたが，これなどは彼らの信仰の特殊性といえる．また，村の中には２本の彫刻された（図２）柱が建てられており，その柱の周りに全ての大切なものを供えるという習慣がある．この柱は昔は１本であったが，悪霊が柱に矢を放って２本に分けたという。彼らは１本だけに魂が宿っていることを知っているが，大事をとってそのままにしておくことに決めたという言い伝えで，その習慣が現在にも続いている[1]と言うことで，それが古くなると祈とう師が取り替えることになっている．

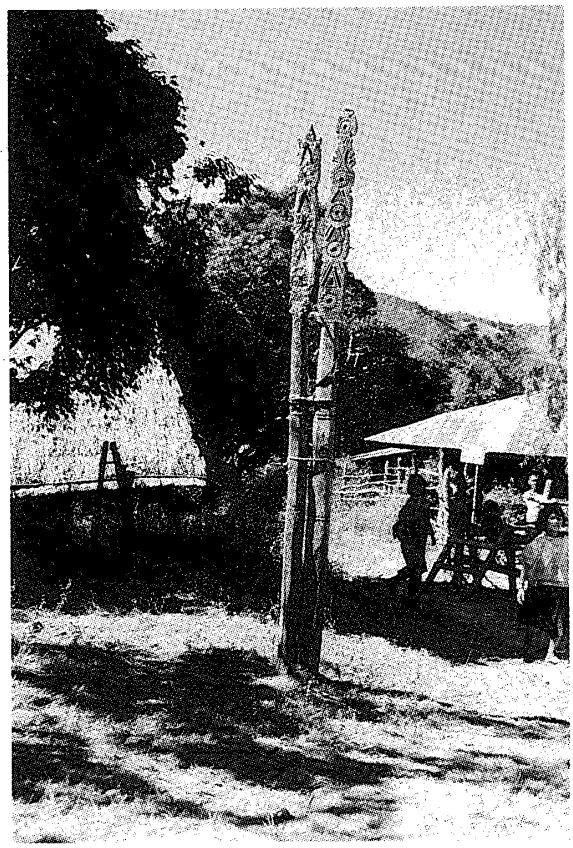


図２　彫刻された儀礼の柱

４．農耕にまつわる儀礼[5]

(1)　焼畑の選択

ラワ族の生業の基本である焼畑地を選ぶ場合その方法は極めて慎重である．それは森は精霊たちの住みかであると信じており，処女林には決してそのまま火を放ち開墾はしない．祈とう師が開墾地を決定したならば鶏を生けにえとし，その胆のうを取り出し胆汁の状態によって畑地の選び方が正しいかどうかを占う．また焼畑を造成する場合，火入れの儀式を行うにあたり，長老の男性によって12の精霊の祭壇を作り，そのうち11の精霊に生けにえを供える．これは12の精霊全部を満足させてしまうと火が調子よく燃え広がりすぎて手のつけようがなくなるという心配からのようである．

(2)　種播き

焼畑の造成が終わって２・３週間すると種播きをするよう祈とう師から指示が出る．その場合種播きの作業に先立ち森の精霊や畑の水をつかさどる谷川の精霊たちのために数羽の鶏と豚と犬を１匹ずつ生けにえに捧げる。これが終わると親類や友人の手伝いを得て家族全員が協力し一斉に種播きをする．この作業は数週間続きそれが終わった５月中旬頃になると祈とう師の指示によりまた生けにえを捧げ雨の降ることを祈る．この生けにえには豚１頭を使うが５年ごとに豚に代わって水牛を１頭捧げるのが習慣となっている．これらの生けにえに使う動物の費用は村全体の家庭が分担し精霊に供え，残りの肉は分けあって食べる．また，稲が成育する２・３ヵ月の間には順調な稲の成育，収穫を祈って生けにえを捧げ様々な儀式を行う．そして，11月から12月になると人々は稲を刈りこれを村へ運び貯蔵する．

(3)　収穫

ラワ族の祭りの中で最も盛大なものは収穫の儀礼である．この祭りには村人以外の者はいっさい入ることは許されない．また，村人は誰１人として村から出かけることもない．この日の朝になると祭りの場には若者たちによって２つの祭壇が設けられ，どの家族も鶏を祭壇に供え，また，両祭壇には１頭ずつ豚がつながれる．また，祭壇の横には木で作った銃，槍，刀などが幾つも置かれる．祭壇に供えた鶏はその一部を生けにえとして精霊に捧げ，残りは村人がそれぞれの家庭に持ち帰り料理し食べる．さらに，豚も殺し，村中の人でそれを分けあう．この収

穫の儀礼により１年間の農耕に関する行事が締めくくられる．

５．結婚の習俗

(1)　歌垣と男女の交際

北部タイ山地民族の若者たちの男女の交際はそれほど放縦ではないようである．ラワ族にもアカ族やカレン族と同様結婚前の性的関係には極めて厳しい戒律がある．このため若者たちが相手を選ぶ公的な場として歌垣の習俗が存続している．たとえ歌垣以前に２人の意志が相通じていても定められた歌垣の場で正式に申し込み，それが受諾されることが必要なのである．

(2)　結婚の儀式

婚約は男性が相手の女性に銀のキセル，タバコなどを渡し，女性がこれを受け取ることによって結婚を承諾したことになる．結婚の話がまとまると村の長老により双方の親族全員が招集され婚資について話し合う．しかし，この婚資はすでに昔から古い銀塊16個と決められている．交渉がまとまると村中の人々を招き花婿，花嫁の家族が祝宴を開くが，この宴は７日間続けられる．ラワ族にとって結婚式の行事の中で最も重要なことは花嫁の先祖の霊を花婿の先祖の霊に紹介する儀式である．どんな場合でも先祖の霊の意向を伺い，その怒りを招かないよう手順を踏まなければならないのがこの種族のおきてである．

６．歌垣と葬儀

歌垣は北部タイの山地民族の間ではどこでも行われているが，ラワ族と同じモン・クメール語族に属するカレン族の歌垣は他の種族のものと大変異なっている．村で葬儀のある時の夜，若者たちは遺骸をとり囲みながら歌垣を行う．葬式は死者と別れる哀しみであるが，生まれ変わる死者に対する励ましでもあり賛歌であるともいう．ラワ族の場合遺体は奥部屋の炉の横に西向きに安置され，３日間そのままに置かれる．夜になると一般の会葬者は帰ってしまうが，その後で若者たちは遺体の置かれている部屋で男女が車座に座り翌朝まで毎夜歌を歌い合う．この歌を「ウー」といい，まず男たちが歌いそれに応えて娘たちが歌う．この歌には５種類ある．すなわち，①結婚の歌　②５年目の歌　③葬儀の歌　④恋の歌　⑤客のための歌などであり，これらを繰り返し歌う。ラワ族はカレン族の影響を強く受けているといわれているが，同様に「死を喜こぶ思想」がある．このことは他の山地民族とかなり異なった習俗である．

歌垣は日本の古い時代にもあった習俗で，これに類似するものであり，妻問いの歌，農耕儀礼に関する歌は多くの場合セットになって用いられてきたが，照葉樹林文化圏の習俗として，日本民族の習俗を比較する上で重要な手がかりとなるのではないかと言われている．

Ⅲ．衣生活

１．女性の衣装

ラワ族の衣装は貫頭衣である．これは衣服構成の上で原初的形態といえるが，北部タイの山地民族の中では色彩的に最も淡白であり，刺しゅうなども少ない衣装である．カレン族の女性の衣装には未婚，既婚の区別があるが，G・Yaung (1969) によればこれはすべてのラワ族に通用するものではないとはしているが，既婚女性は紺の貫頭衣，未婚女性は白の貫頭衣のところもあるという．しかし，今回調査したバン・チャン・ノーモイ村の女性の衣装は生成りの腰丈までの貫頭衣に織物のタイトなスカートであって，未婚，既婚の違いは見られなかった．(図３)

上衣は布幅二枚を中央で縦に接ぎ，前後同寸に頭の出る寸法だけを縫い残し，脇は袖口が縫い残されただけの簡単な貫頭衣である．布は太い糸で打ち込みが強く堅いはん布のような生地である．色味は両脇側に0.5cm幅の赤色が織り込まれていることと，衣装によって色は異なるが，中央の接ぎ線にそって**X**や**X**型の針目で青や赤の色糸で１cmの間に２・３針目程の小さな閉じ

図３　女性の衣装

るための糸の色だけである．

下衣はスカート型式であるが，筒型の細身でふくらはぎ丈にひだも取らずにはき，腰紐で止める．ラワ族は織の技術には優れていて絣の模様を「稲妻」といってスカートの縞柄の中に織り出している．藍染の色に絣の縞と幅の広いえんじ色の縞柄の布を横に２枚接いで，えんじ色の部分を裾にもってくる．したがって，縦縞の布を横縞にはくことになる．接ぎ目は耳どうしを細かい巻き縫い風に突き合わせて接ぎ，上・下の端は布の耳そのままである．また筒型にするための接ぎ目は折り伏せ縫いである．この柄は村によって多少異なるようである．衣装の平面図は図４に示す．

足には黒や藍染の筒型の脚絆をつけ，ひざに飾りをしている．それは木綿の紐に漆をかけて黒くしたものを輪にして何本もはめている．（図５）この人は19本はめていたが，だんだん増やしてゆくということである．多い人は40本くらいはめているという．

履物は図６のような下駄であるが，今回の調査ではゴム草履や素足の人しか見かけなかった．これは季節的に乾季であったためであろうが雨季になり，地面がぬかってくる時には下駄でないと歩けないのではないかと思われた．

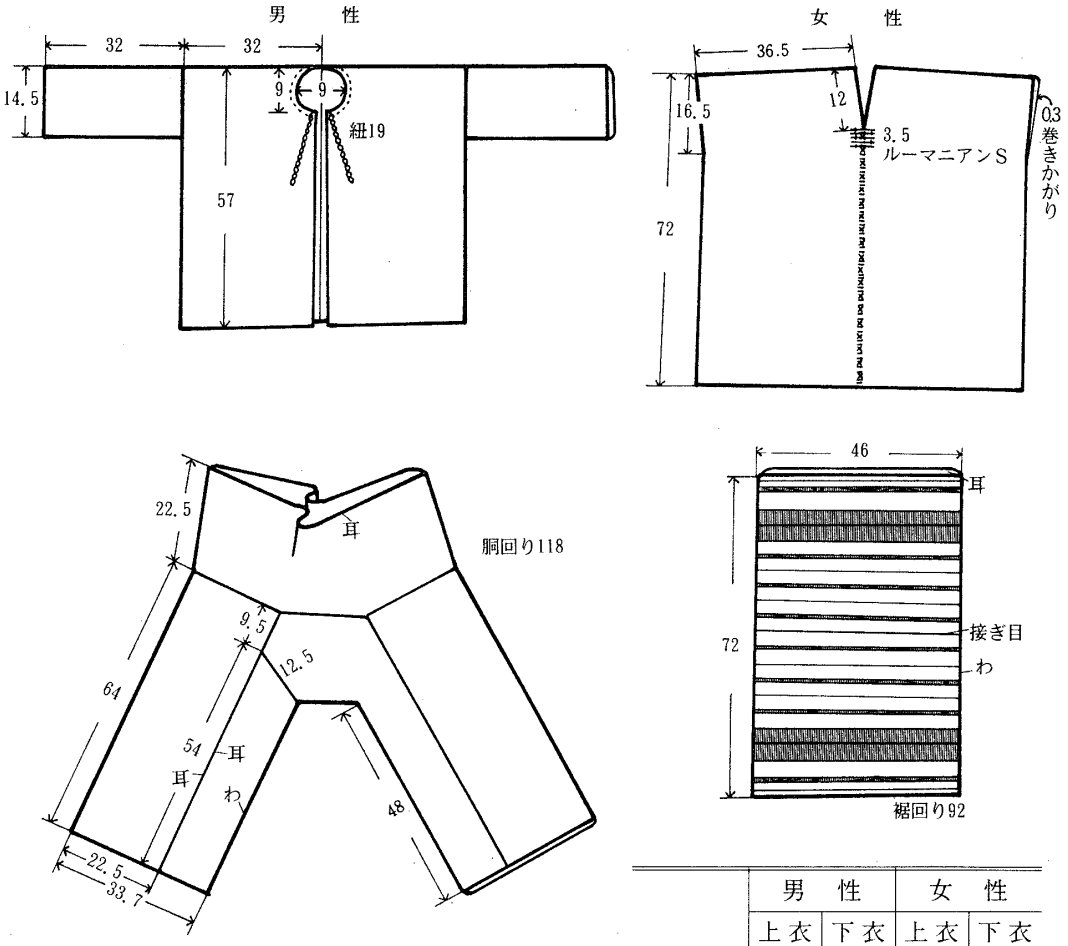
髪型は低く後で束ねて髷を結っている人が多く，ターバンをかぶっている人も見られたが，一般にそれは既婚者だけのようで白や縞織の布をかぶっているのが目立った．

装飾はあまり高価なものはしていなかったが，銀の首飾りや腕輪，また赤い古いベニスのビーズともいわれるもので衿ぐりがかくれる程多くつけている．この赤い首飾りはカレン族のあいだでもよく見られる．またラワ族の耳飾りの型は変わっていて鼓型の面白い耳飾りで，細い筒の部分を耳の穴に通してはめている点は興味深い．

２．男性の衣装（図７）

男性の衣装は上衣・下衣とも白の無地である。上衣は前開きで細い袖がつき，下衣は平面裁ちのズボン型式である．（図４）下衣には前後がなく布幅３枚で片足分とし，内股部分の布に切り込みを入れて股上の部分を構成している．

G・Yaung (1969) によればラワ族の衣装はカレン族の衣服形態を取り入れたものであるようだ[1] といっているがその理由は定かではない．しかし，ラワ族とカレン族は言語的にモン・ク



		男　性		女　性	
		上衣	下衣	上衣	下衣
密度 本/cm	タテ	7	8	9	9
	ヨコ	16	15	16	8
厚さ(mm)		1.04	0.95	0.97	1.05
重さ(g)		360	460	310	220
織		平織	平織	平織	平織

図4　ラワ族の衣装（単位cm）

図5　ひざの飾り

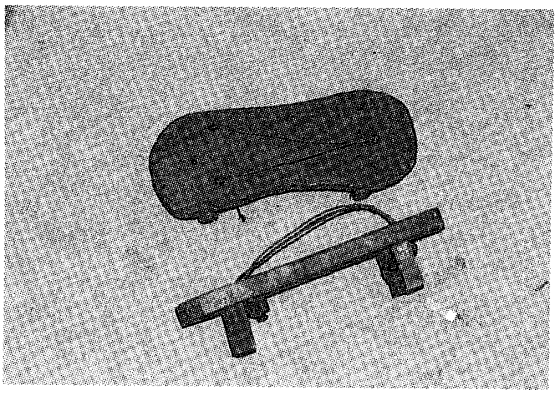


図6　下　駄

図７　男性の衣装

メール語系に属し，習俗等もよく似ており，カレン族との結婚の習慣もあるということなどから見ると，どこか古い時代に何らかの交流があったものと考えられる．

３．染色と識り

ラワ族はスカートに藍染で絣の染色技術を持っている．そのスカートの藍染は藍の生の葉をそのまま使用する方法をとっているが，その過程を述べると４月下旬に種を播き６月と10月に収穫する．その時，枝ごと葉をとり３・４日水に浸してそれから石灰の中に入れる．しばらく浸してから水と枝はすて，アルカリ性の水を入れてよく混ぜる．それにより石灰は青い液状になる．そこへコップ１杯くらいの米の酒を入れて混ぜ合わせ２・３日ねかせる．米酒は35度以上あるアルコール度の高い酒であるが，２・３日後に発酵してあわが出たならば染色ができる．次に布は水に浸してしぼり「藍染液に浸す．これを日陰げ干しをして乾かす」この作業を１日平均２から４回繰り返す．これを30回くらい繰り返し行い染める．[2)]

衣装の素材は木綿であるが，これも自給自足である．まず綿の種を除き，実を収穫する．弓で綿打ちをしてほぐす．次に糸を紡ぎ織る．（スカートの生地は先染である）機は他の山地民族の間でも広く用いられているいざり機である．（後帯機ともいわれている）（図８）

日常は着のみ着のままの生活を送っている彼らにとって新年は，家族全員が新しい衣装に着替える時であるが準備するのは女性の重要な仕事である．

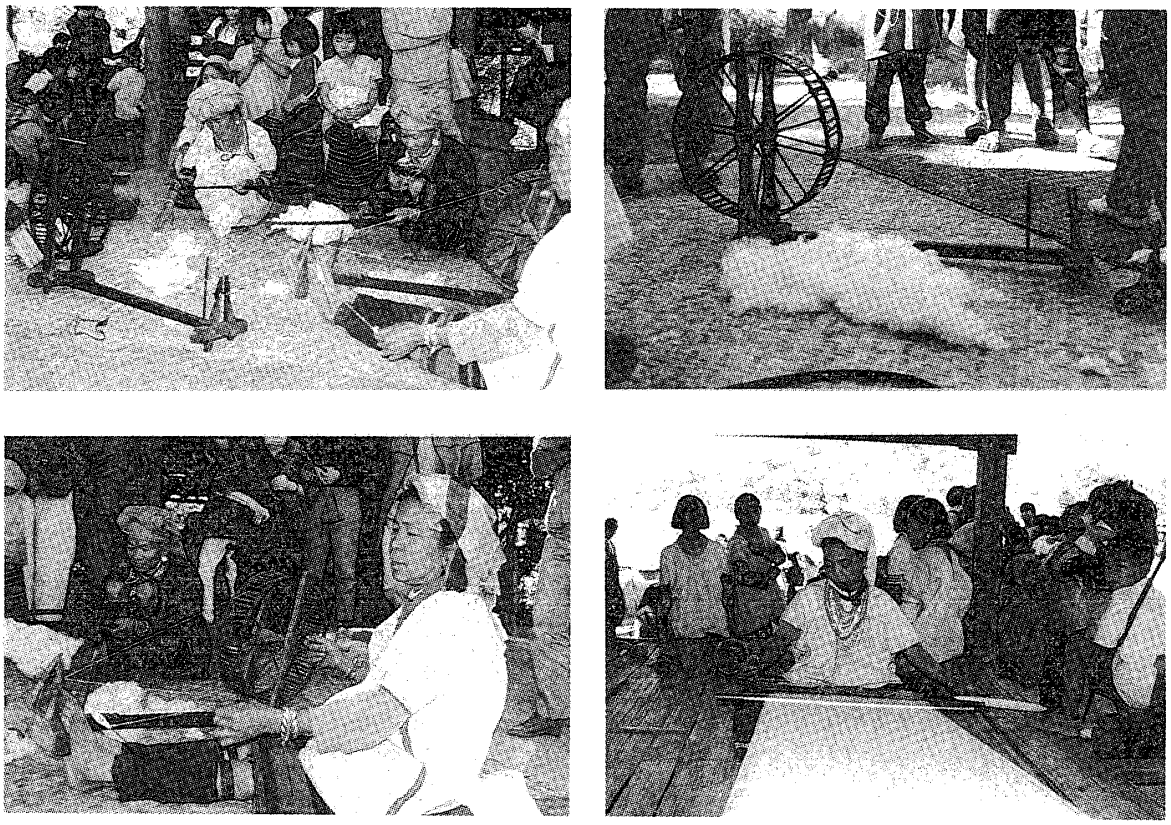


図8　機織り

要　　約

タイ北部山岳地帯にはメオ族，ヤオ族をはじめ10数種の少数民族が住んでいる．これらの民族にも近代化の波が押寄せ，あるものは周辺都市からの影響を大きく受けつつある．この中にあって今なお先祖伝来の伝統文化を保持している民族もある．これらの民族のうち伝統的な生活文化を固持しているラワ族について1989年に調査し次のような結果を得た．

1．ラワ族は言語的にはモン・クメール語系に属し，古くからタイ西北部からミャンマーにかけて分布している．タイでは西北部のマエ・サリエン，マエ・ホンソン，チェンマイ周辺に多く住みおよそ1万人と推定されている．

2．ラワ族の部落は山地から平地にわたって広く分布しておりクンシュタッターの分類によれば，(1)伝統的な山地の村，(2)タイ化した山地の村，(3)タイ化した谷間の村，(4)移住民の村の4つに分けられるというが，今回調査した村は(1)のグループに属するバン・チャン・ノーモイ村の生活習俗と衣装についてである．

3．この村の生業は焼畑耕作による農業で米作及び野菜を主とする自給自足であったが，5・6年前にキャベツロードが通り出荷をはじめた．

4．食生活は米を主食とした野菜の副食が日常生活であるが，祭礼の時には神に生けにえとして捧げた鶏，豚などの肉も食する．

5．住居は高床式の母家と高床式の穀倉で構成されている．ラワ族は他の種族に比べて優れた建築技術を持っている．特に手の込んだ彫刻のされた家の柱や，祖霊の宿るという柱が村の中で見られる．また今日，屋根に設けられた干木については日本の古い伝統的建築文化との関連

が追求されている．

６．ラワ族の儀礼はアニミズムに基づく冠婚葬祭の儀礼が多いが，農耕に関する儀礼が最も盛大に行われる．

７．山地民族の間にも古くから歌垣の習俗があり，男女の公的な婿選び，嫁選びの交際の場として，また，葬儀の際には魂を送る儀式として重要な習俗とされているが，日本の伝統文化を探究する上でも重要な意味をもつものと思われる．

８．女性の衣装は原初的な形態ともいえる貫頭衣の上衣に筒型のスカート形式である．また，ラワ族の衣装はタイの山地民族の中では色彩的に最も淡白で，刺しゅうなども少ない衣装である．しかし，スカートに織り込まれている藍染の絣の柄はラワ族のみに見られる木目に似た柄である．

９．男性の衣装は上衣・下衣とも白の無地である．上衣は前開きで細い袖がつき，下衣は平面裁ちの幅の広いズボンである．

最後に，本論をまとめるにあたってご協力いただいた名古屋女子大学短期大学部の堀真佐子助手に対して，厚くお礼申し上げる次第である．

文　　献

1）G. Young : The Hill Tribes of Northern Thailand (1969)
2）J. S. Uberoi : From The Hands of The Hills (1981)
3）岩田慶治：東南アジアの少数民族，日本放送出版協会（1971）
4）カノミタカコ：タイの国より愛をこめて，染織と生活社（1982）
5）鳥越憲三郎：原弥生人の渡来，角川書店（1982）
6）若林弘子：高床式建物の源流，弘文堂（1982）
7）若林弘子：風俗，第22巻１号，43～59，日本風俗史学会（1983）
8）杉本正年：日本基層文化の整理学，文化出版局（1981）